師匠のグッド・バイ

シー・ユー・アゲイン　後日談４

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18659938

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, 霊幻総受け, ♡喘ぎ, モブ霊, 律霊, 芹霊, モ腐サイコ小説50users入り

高級娼婦から足抜けしようとする師匠とそれを手助けする悪霊のエク霊の、地獄の後日談です。芹霊のみ本番ありです。少し出血表現があります。お好きな方はよろしくお付き合いください。これにておしまい、今までありがとうございました。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

蛇足※ネタバレです！

赤子の父親はエクボ（の借りてる身体の１つ）です。回数が１番多かったので。ただ、めちゃくちゃ霊幻似なので見た目では父親が誰か分かりません。魂を覗くとちょっとエクボの魂が混ざっています。命名はとんでもない揉め方したので、最終的に霊幻の名前から一文字とって『鷹（たか）』と霊幻から名付けられました。ちなみに超能力も使えます。ますますややこしい。遺伝子判定での父親の特定は、全員デメリットしかない（自分以外が父親と出る可能性の方が高い）ので拒否します。認知を申し出る人間が４人もいる変な状態のまましばらく過ごしますが、組が法律上の母親を用意してくれたので、父親は霊幻と言うことで決着へ。子供は５人の父親にべたべたに愛されてスクスク育ちますが、思春期に真相を知ってえげ

つない反抗期に突入したりします。

エクボはこっそり自分と霊幻の魂を１０年かけて混ぜています。超能力者達がエクボを消そうとすると、霊幻の魂も消滅する仕掛けです。この行いを超能力者達は非常に怒っていますが、エクボはどこふく風です。実は霊幻が何かの事故で消滅してしまったら、エクボも消えてしまうようにもなっているのですが、それも悪霊にとっては些細なことなのです。

シー・ユー・アゲイン　後日談４

「……すみません、軍事演習が後ろにずれ込んじゃってて。３０分ほど待っててもらえませんか」

静岡県の自衛隊の基地。
そこに珍しいお客さんたちが来ていた。
霊幻さんと、律くんと、肉体を借りてるエクボ君だ。
俺が所属してる超能力を研究してる部隊は、ほとんどが防衛大学校の方の所属で、自衛隊だけど、研究機関と言った方が仕事は近い。
今回律くんが超能力関係のトラブルを起こしてる、と相談したら、ラボのメンバーは諸手を挙げて歓迎していた。超能力者の、特に強力な超能力者のサンプルは少ない。余計な実験までしないように釘は刺しておいたけど、はたしてどうだろう……。
「芹沢さん、自衛隊の制服似合いますね」
律くんにそう言われてテレる。陸上自衛隊の紫紺に金ボタンの制服は、実は、これでも、ちょっぴりモテる服で。
チラッと霊幻さんの様子を伺ってしまう。
「？」
ニコっと笑い返されてがっくりした。
俺って中々に好物件だと思うんですけどね、少しは乗り換えようと思ってくれませんかね、悪霊から。
「演習は本来非公開なのですが、超能力者の方もいらしていることですし、是非我々の研究に理解と興味を持っていただきたく」
ラボの准教授が霊幻さんたちを見学させることにしたらしい。俺のような協力者に律くんもなってくれないかな、と思っているのだろう。
霊幻さんとエクボ君は付き添いだ。
霊幻さんは原因に心当たりがあるらしく、それもあって付き添ってるらしい。エクボ君は霊幻さんの用心棒だ。律くんと俺を警戒しているのだろう。自分が１番霊幻さんに害をなしてるくせに、図々しいな……。

「……演習場あいた？じゃあ芹沢くん、火力演習頼むよ」
「あ、はい」
静岡第二演習場。市街地を模したその演習場では、主にテロリスト対策の模擬戦が行われている。
今回はもちろん俺がその『超能力を持ったテロリスト』役だ。
軽トラックで中心地まで移動し、すでに配備済みの部隊の前に１人で立つ。
盾を持った重装備の自衛官２００人の前に、超能力者１人。まあ想定としてはこんなものだろう。
自分で言うのもなんだけれど、俺と同じレベルの超能力者はそうそういない。『平均的な』危険な超能力者１人だと、２個中隊ぐらいは必要だ。
南西に配置された部隊に向かってマイクで呼びかける。
「超能力者の芹沢です。今日は実際の超能力者との演習です。手加減はしますが、危険を伴いますので、気を引き締めてかかってください」
超能力者？
とざわざわと部隊で混乱と嘲笑が上がる。
俺はため息をついて、演習場に置いてある壊れた自家用車を持ち上げ、部隊の上を通過させた。
「あなた方は今、政府の機密情報に触れています。これ以上の遅延は困ります」
部隊の背筋が伸びる。
「では、まず、超能力者の耐久力をお見せします。110mm個人携帯対戦車弾、構えてください」
ふたたび部隊に動揺が走る。歩兵が持つ最大火力だ。一個人に向けるものじゃないからだろう。
「俺に向かって打ってください。ヨーイ、」
戸惑いながらも命令には全員従う。
「テ！」
２００本の閃光が弧を描いて俺に向かって飛んでくる。
俺は両手でバリアを張り、目の前の壮絶な閃光花火を楽しんだ。
「と、まあ。兵卒の火力は超能力者には無意味です」

ぱんぱんと手を払ってマイクで話し出すと、また部隊がざわざわしはじめる。
「はい、質問を許可します」
真っ直ぐな手が伸びたので、そう返した。
『教官、有効な攻撃は何でありますか！？』
ふむ。
「……核爆弾でも、耐える人は耐えるから、攻撃は税金の無駄だと思うよ」
そう。大事なのはここから。
「あなた方は超能力者には無力です。ですが、大事な使命を帯びていまそこにいる方々です。あなた方が１番してはいけないことは、無駄死にだ。盾を円形に構えて下さい。いいですか、超能力者の攻撃のほとんどが念動力で、物理です。あなた方がしっかりチームワークを発揮すれば、攻撃に耐えながら撤退できるはずです。では、一発打ってみますね。ヨーイ、テ！」
ず、と地面ごとめくり上げながら。
念動力の塊が２個中隊を襲う。
『うわあっ！？』
「よろめくな！」
危ないなあ、もう。
「あなたが倒れれば周りや後ろの仲間も危険に晒されます。いいですか、しっかり盾を構えて耐えて下さい。これを３０分間耐えていただきます。その間にジリジリと後退して、撤退ラインを目指してください。いきますよ！ヨーイ、テ！」
ずごごご、と演習場が揺れる。
今日の部隊の人は、上手に撤退できるといいな。

※

「鬼教官だなお前」
コーヒーを飲みながら見学していた霊幻さんがじっとりと俺を警戒する目をしながら言う。
「え、そうですか？でも最低限のことしか言ってないですよ、俺。

ラボの人みたいに超能力犯罪者捕まえろとかそんな危ないこと言いませんもん」
「……ま、いいや。そろそろ律くんの話したいんだが、いいか？」
霊幻さんたちの相手をしていた准教授が椅子から立ち上がる。
「お待たせいたしました。診察室へどうぞ」
准教授の代わりに教授が交代した診察室で律くんのことをきいて、硬直してしまった。セックス中毒？律くんが？は？思わず霊幻さんを睨んでしまった。あなたのせいでしょう、十中八九。
「結論から言うと、セックス依存症は依存症なのですが、正確には違うものですな。厳密には自分で作り出したプロテクトの解除条件を満たす状態を求めて彷徨う夢遊病と言った方が正しいでしょう」
「はあ」
「軍事関係の仕事をしているとね、心に傷を負ってしまう超能力者も多い。そういった者が、心を守るために無意識に超能力を使ってしまうこともね。影山さんのはソレですなぁ。そういうプロテクトを解除するのは、条件を満たすか、廃人覚悟で洗脳系の能力者に解除してもらうかのどちらかです」
教授が霊幻さんをじっとみる。
「お聞きしたいのですが、影山さんがセックスを求めてくるのはトリップ中だけですか？それともいつも？」
「……いつも、だと思います」
「では、トリップ中のみの影山さんの行動はありますか？」
真っ赤になって影山くんが暴れ出したので、慌ててエクボ君と取り押さえる。
「『愛してる』とか『可愛い』とか、『離したくない』とか……そういうことを言うのは、トリップ中……だけだと思います」
がくりと律くんの力が抜けた。なんだそんなことか……。
「なるほど。日本人男性あるあるだね、恋人に中々愛情を伝えられなくてこじれちゃうの」
「いえ彼は私の恋人ではないので。私の恋人はコッチです」
「……ええ！？」
霊幻さんがエクボくんを親指で指して教授を混乱させている。
「僕は間男です」

「いや律くん間男ですらないでしょーが。彼は私をお金で買っているだけの客です」
教授が頭を抱えて関係相関図をコピー用紙に描き始めた。
「問題を影山さんだけに絞ろう。影山さんは霊幻さんが好きで、他に恋人がいると知りながらお金で霊幻さんを買ってセックスをした。その結果欲望に歯止めが効かなくなって理性にプロテクトがかかってしまった、と」
「……はい」
うわあ律くんめちゃくちゃ恥ずかしそう。何の公開処刑だろ、これ。
「うーん……霊幻さんを襲うところはある程度薬で抑えるにしても、夢遊病状態になるのはプロテクトを解除していくしかないだろうね。取り敢えず霊幻さんに会う度に告白してみてはどうかね？」
「は……はぁ！？」
「最初は心を込めなくていい。こういうのはクセ付けが大事だからね。何を言うか決めておくんだ。『霊幻さん好きです。今日も可愛いですね』とか」
「レイゲンサンスキデスキョウモカワイイデスネ」
「そうそう、その調子。それを頻繁に繰り返してやっていれば、いずれプロテクトは消えると思うよ。……君たちの関係に色々と思うことはあるけれど」
優しく教授は律くんに笑いかける。
「愛の言葉が罪になるなんて、そんな悲しい関係では無いと信じたいな」

※

基地の出口まで送って。
「あ、そうそう、芹沢、明日の予約のことだけど」
霊幻さんからそう切り出されて、ギクっとしてしまった。
「あの……」
制帽を深く被り直して顔を背けてしまう。
「……すみません、明日はキャンセルで……」

「またキャンセルぅ！？」
霊幻さんの少し怒った声にびくりとしてしまう。指導先の兵卒に見られていないか不安になってきた。
「……おっまえな、予約してはキャンセルって、これで何回目だよ」
「ご、５回目……かな」
「予約する度に相談所とかマサくんとかの予定開けてんだからな！？いい加減にしろよ！」
「……すみません」
「だめだ。もう怒った。もうキャンセル料取るからな。コース代と同じ分」
「……えぇっ！」
きゅ、と手を握る。
そうだ。いつまでも逃げてはいられない、ということだろう。
これは、そういう機会だ。
「……じゃあ、明日、お願いします」
「おう、分かった」
「……あの」
「ん？」
何気なく俺を見上げる霊幻さんを、目に焼き付けるように見つめる。
「俺、明日で、最後にしようと思ってるんです」
「最後、って」
「ずるずると霊幻さんを思い続けるのも疲れました。だから、ちゃんとケジメをつけようと思って」
「芹沢……」
「明日、霊幻さんを買ったら。俺はきっぱり貴方を諦めようと思います。だから、明日は本当に、俺の恋人になって欲しい」
「……っ」
「コースの間、俺の霊幻さんでいて下さい。そんで……時間終了と共に、フってください。それで俺は貴方を忘れます」
「分かった。まかせろ！その依頼、この霊幻新隆が」
「引き受けた！……ですか？久しぶりにききましたね、ソレ」

取るなよ、と霊幻さんが笑う。
ああ。
貴方と過ごした日々は、何もかも輝いていて、楽しくて。
それは貴方がいるからだと気がつくのに時間は掛からなくて。
霊幻さんの気持ちがこっちに向いてくれるまで、影山くんと大事に守ってきたつもりだったのに。
……霊幻さんの態度がおかしくなってきた時に、すぐにエクボくんと『お話し』すべきだったな……。
「じゃあ、また明日」
マイクロバスに消えていく霊幻さんたちを見送る。
富士山をあおぎながら、調味市に思いを馳せた。

※※※※※

ヤクザの車の中で、霊幻さんが札束を数えている。
「はい、確かに」
「あの」
「うん？」
「俺と付き合ってください」
右手を差し伸ばして頭を下げる。
「……よろこんで」
ふわりと両手で包まれて、ぶわっと心が暖かくなる。
今日１日は。
これで霊幻さんは、俺のカノジョだ。
「……」
マサさんが札を数える間が、落ち着かない。
なんとなく霊幻さんをじろじろと見てしまう。
「……あの」
コートを着たスーツ姿の霊幻さん。今日はなんだか一段と綺麗な気がする。でも。
「服、プレゼントしてもいいですか」
……下心見えすぎだろうか。でも今日は、できる限り俺のわがままを叶えて欲しい。

「……いいよ。脱がせたい服、選ぶといい」
バレてた。
「どんな服着せたいんだ？」
する、と霊幻さんが手を絡めてきて緊張する。霊幻さんの恋人の距離感て近いなぁ……というか、霊幻さんの距離感そのものが元々近い気もする。他人を懐に入れてしまいやすいタイプなんだろうか。
……小さい手だ。こんな華奢な手で、相談所を切り盛りしてるんだなぁと思うと、少し不安になる。嫌な客は来てないだろうか。危険な依頼にうっかり１人で行ったりしてないだろうか。……エクボくんが最近はピッタリ霊幻さんに張り付いてるから、その辺は大丈夫か。問題は別のところ……
「芹沢？」
「すみません。……ちょっと、色っぽいの、着て欲しいです、かね」
ごきゅりと喉を鳴らしながら、霊幻さんの喉元を見てしまう。夏場、たまに襟首をゆるめてる霊幻さん。あれはなかなか、ぐっとくる。
「ちょっとエッチなやつ？」
──あ、これ訓練で受けたことあるな。
ボディータッチをしながら、色っぽい声でエロいことを言う。
破壊力満点の今の霊幻さんのしなは、自衛隊やテロ組織の訓練とかでお目にかかるレベルのハニートラップだ。
うーん、訓練は平気だったけど、やっぱり実戦は違うな。
「……エッチなやつです」
「まかせろ。お前好みのやつをドンピシャで着てやる」
「霊幻さん、俺ちょっとトイレ行ってきていいですか」
「……口で抜いてやるのに」
「いや、一度そう言う雰囲気になると、止まれないんで」
「……絶倫なんだな」
ペロ、と霊幻さんが舌なめずりをして腰に甘い痺れが走る。
……この人がスパイとかやったら、さぞかし優秀な諜報になったんだろうな……。
近所の公園で軽く抜いて戻ると、霊幻さんは車から降りて俺を待っ

ていた。
「さ、買い物行くぞ」
霊幻さんが俺の手を取る。すっぽりと手の中に収まる手のひらにドキドキする。お買い物デートかあ。服をプレゼントしたら霊幻さんは喜んでくれるのだろうか。あまりイメージ湧かないけど。この人はシフトの穴を埋めてあげた方が喜ぶ気がする。
「まずは、ズボンかなー」
駅前の複合施設に霊幻さんはスタスタ入っていく。ユニクロでスキニージーンズの試し履きを始めた。
「すみません、このサイズで股下もう少し長めのありますか」
淡いインディゴブルーのスキニージーンズを手に取って店員さんに声をかけてる。
……俺、ジーンズ履いてる霊幻さん好きだって言ったことあったっけ……！？
好みドンピシャ当てられて、それこそ狼狽える。人間観察能力凄すぎないか、あの人。
「このまま着て帰るので、タグ切ってください。お会計は彼が払います」
「はっ、はい」
慌てて財布を出す。……プレゼントにこんな安い服でいいんだろうか。
「次は、靴な」
霊幻さんは目的のものがあるのか、迷わずＨ＆Ｍに入って、さっきのスキニージーンズと合わせながら、少し踵の高いブーツを試着している。
「よし、これだな」
キャラメル色をしたショートブーツを選んだ霊幻さんを見て驚いた。
足なっっっっが。
スキニージーンズなんてただでさえ足を長く見せるのに、それに合わせてヒールのあるブーツまで履かれてはもう「足を見ろ」と言わんばかりの服装になってしまっている。
周りの人も『え？モデル？』『足長っ』とざわざわしながら通り過

ぎていく。
「芹沢、お会計」
「あっはい」
あの……。
俺足フェチなの、言いましたっけ……？
「不思議そうな顔してるなぁ、芹沢」
にっと蠱惑的に笑って霊幻さんが頭を俺の肩にぽすんと当てる。
「お前日頃から俺の足ばかりじろじろ見過ぎなんだよ」
「ぐっ……」
不覚……！
結局今も、霊幻さんのキャットウォーキングから目が離せないでいる。
くっ……いい脚ですね……！
「転びやすいから、手繋ぎ必須な」
さりげないボディータッチの許可……さすがです霊幻さん……！
「何怖い顔してんの。あとはなぁ……たぶんレディースしかないんだよな」
霊幻さんはフェミニンな女性向け個人経営服飾店に入っていく。
オフホワイトのニットを手に取って、店員に声をかける。
「すみません、シャツの上からでいいんで、コレ試着しても大丈夫ですか」
男性の声に訝しげに店員が顔を出すが、霊幻さんの脚を見て態度を変える。俺と同じく『似合いそう』と思ったのだろう。
「試着用インナーがございますので、そちらをご利用ください」
「ありがとうございます」
不織布のタンクトップを受け取り、霊幻さんがゴソゴソと着替え始める。俺と店員さんがソワソワしながら待っていると、
「……どうかな？」
それこそ雑誌に載ってそうな人が顔を出した。
Ｖネックが色っぽいニットセーターは程よくダボついていて、スキニーの足元をより細く見せる。
「お似合いですお客様！！」
俺を押し退けるように店員が興奮気味に霊幻さんに駆け寄る。

「骨格が細めなので、レディースも良くお似合いになられます。どうです、こちらのオフショルダーのものや、こちらのお色味のものもお似合いになられるかと思うのですが……」
えええ、これ以上露出するのはなんか下品だな……少なくとも俺は好きじゃない。
「あの、今日は急いでるので……また来るので勘弁してくださいね。これ、着て帰るのでタグ切ってもらえますか？」
俺の心を読んだかのように霊幻さんが服を選ぶ。なんだこの人……社会心理学でもやってるのか……？
「服ありがとな。……行こっか。ちゃんと支えててくれよ」
不安定だけれど、伸びやかに動く足元。
チラリとのぞく真っ白な胸元。
あとは……
「ネックレスでも付けるか？」
ゴールドの細いチェーンのネックレスが揺れてたら、最高だろうなぁ、なんて。
……サトリのバケモノ？
複合ビルに入っていた個人経営のアクセサリー店でネックレスを購入する。
あああ〜……。
男が求める『丁度これぐらい』を絶妙についてくるな、この人。
「今更ですけど、俺は自分のカノジョがこんな格好してたら心配になります」
「心配しすぎだろ、こんな露出が少ない格好で」
「男の目をめっちゃ惹きつける格好でしょ、ソレ」
実際に、さっきから通りかかったナンパ師みたいな男たちが、
おっ、と霊幻さんに目をとめては、横にいる俺と目が合ってそそくさと退散していく、というのを繰り返していた。霊幻さんの性別もお構いなしだ。
「……お前のために着てるんだぞ、俺は」
「正直、露払いでデートどころじゃなくなってしまいましたね」
「じゃあ、ヒトケの無いとこ行こっか」
バクン、と心臓が跳ねるので。

そういう言い方はやめて欲しい。
気が散る……
「こっちだ」
霊幻さんに指示されながら、気がつけば俺はネットカフェに到着していた。
「……こんな所でいいんですか？」
「ヒールで歩き回るの嫌だし、結構好きだよ、ネカフェ」
正直……すごくほっとした。水族館とか、そういう人が多い所は緊張するから苦手だ。ネカフェは助かる。
「せっかくだからゲーム機借りていこーぜ」
「え、俺、家にあるんで……」
「俺がやってみたいの！」
俺は受け付けでフリードリンクとポテトチップスとコアラのマーチを購入する。
空いていたのか、１番いい部屋を頼んだら、広めの豪華な個室に通された。ソファーがあって、大きなクッションがあって、ＰＣが2台設置されている。
その2つの内の1つのディスプレイに、店員がゲーム機を繋いでいる。
「飲み物適当に取ってきますね」
霊幻さんはコーヒーでいいだろう。俺はせっかくなので謎のアセロラコーラなるものを飲んでみることにする。
部屋に戻って、ギョッとする。
手持ち無沙汰な霊幻さんが大きなクッションにもたれかかっていただけなのだが、その姿が妙になまめかしくて。
「おー、おかえり」
「あっ、これ、コーヒーです」
声が裏返ってしまった。
「このゲーム、つまんない」
みると、少し拗ねているようだ。
「何やってるんですか？」
「ダークソウル？とか言うやつ」
「ぶっ！！！！」

なんでよりにもよってそんな高難易度ゲーを引き当てるんだこの人！？
「絵が綺麗だし、面白そうだったんだよ。でもすぐ死ぬから面白くない」
「……これはそういうゲームでして……あの、他のにしません？」
貸し出されたゲームソフトを見る。アサシンクリード、コールオブデューティー、モンスターハンター……ちょっとアクションに偏りすぎじゃないか？
その中に。
ＩＣＯがあった。
「これはどうですか？難易度も手ごろだと思います」
「……『この人の手を離さない。 僕の魂ごと離してしまう気がするから』」
キャッチコピーを読み上げた霊幻さんにドキっとしてしまう。
何故か、影山くんに言われた気がした。
――俺と影山くんの覚悟は違う。
影山くんは人生をかけて霊幻さんを追いかけている。でも俺は違う。霊幻さんのことは好きだ。でも、人生は賭けられない。年齢のこともそろそろシャレにならなくなってきた。結婚のことだって、ちゃんと考えないと。
いくら納得いかないからって、もう、霊幻さんだけを考えて生きていく訳にはいかないんだ。
「綺麗だなー……」
ゲームが始まった。俺は最近気になっていたマンガが書架に残っていたのを見たので、それを取りに行くことにする。
霊幻さんが俺の好きなゲームをしてて。
その横で俺がマンガ読んでて。
くっ……幸せだっ……。
こういうの。こういうの夢見てたんだよなぁ……。
２時間は短い。晩御飯の時間まで延長しよう。
「芹沢ぁ、詰まった」
部屋の鍵を閉めてマンガを置くと、霊幻さんがもたれかかってくる。

……いい匂いするんだよなぁ、この人、今日……明らかに何か仕掛けられてる。
けど、抵抗するのも野暮な気もするし……。
「どこですか」
序盤の難所だ。ヒロインとの連携がはじめて必要になる場所だ。
「これは、……して、……を、こう……」
「ムズい。芹沢やって」
コントローラーを渡される。
「呆れたなぁ。これくらい自分でやりましょうよ……はい、これで進めますよ」
「さんきゅ〜」
霊幻さんは大きなクッションにうつ伏せに乗りかかりながらゲームを進める。
ぱた、ぱた、とたまに床を叩く脚が目にチラついて。
……マンガに集中できない。
「……触れば？」
胡乱にゲーム画面を眺めている霊幻さんから声をかけられてドキっとする。
「そんなに気になるなら、触ればいいじゃん。恋人なんだし」
恋人って勝手に脚とか触っていいんだろうか？分からない。けど、霊幻さんがいいって言うなら。
ずるり、と靴下を剥ぎ取って。
ぱくり、と足の指を口に含んだ。
「えっ！？」
驚いた霊幻さんがコントローラーを取り落とす。のを、超能力で受け止める。壊れるんで気をつけてください。
「嘘、足舐めんの！？ちょっ、ここじゃダメだって！」
いいって言ったじゃないですか。
無視してぬるぬると足の指を舌で扱くように舐めしゃぶる。
「ぃやあ……っ、ふ……っ、っん、」
……？霊幻さんが顔を真っ赤にして足をモジモジさせる。足、弱いんだろうか。
「かうぱー、出ちゃうから、も、やめて……」

！！！！
「す、すみません！」
慌てて口から足を外す。
「おれ、足の指も、弱いから……ホテル以外で、しゃぶんないで」
「すみません、本当にすみません」
「俺にしゃぶらせる分にはいーよ。それとも。……汚さないように、俺、コンドーム付けようか？それだったら、好きに触っていいよ」
ごきゅりとまた唾を飲み込む音が響く。
「……お願いして、いいですか」
「……ん、分かった」
霊幻さんはゴソゴソと鞄からコンドームの箱を取り出す。
慣れた手付きで自分に装着した。
「芹沢も付けとく？」
「や、俺はそんなに我慢汁出る方じゃないんで」
それに、コンドームを着けると完全にセックスの気分になりそうで怖かった。
霊幻さんはコンドームを着けた自身をしまい込み、服を直す。
その霊幻さんを、俺は後ろから膝の上に乗せる形で抱きしめた。
「はー、催淫剤のにおい……」
「……匂い変えようか？」
「楽しんでるんで結構です。あれ？インナー着てないんですか？」
ごそ、とセーターの裾から手を突っ込んで。
「あっ」
霊幻さんが鋭い声をあげて、一瞬固まった。
もしかして、もしかしなくても、これは相当みだらなことをしているのでは……？
「はっ、はっ、はっ、はぁっ、」
不審者よろしく息が上がってしまう。霊幻さんの服の下をまさぐる手が止まらない。
「ぁっ、ん……っ、せり、ざわ……っ」
開いた襟口から、俺の手が霊幻さんの上を這い回るのが見えて。
思わず乾いた唇を舌で濡らす。

「ぁ……っ」
それを見た霊幻さんがブルリと身体を震わせる。捕食される側の恐怖が快感として身体に錯覚されたのだろうか。
「霊幻さんがイくところ、見たいです。ちんこ触っていいですか？」
「……乳首でも、イケるけど」
俺は何度生唾を飲めばいいのだろうか。
「そういうのは、夜に」
「……分かった。触っていいよ」
霊幻さんを大きなクッションにもたれかからせて座らせ、俺はその前に座る。スキニーのムチムチした太ももに触れて、たまらなくなる。絶対スマタしてもらおう……。
ジーンズの金具を外し、ジッパーを下げて、下着から霊幻さんの性器を取り出す。
さっきも思ったけど、色が薄くて可愛いな、霊幻さんのちんこ。
「……っふ、ぁ……」
手で筒を作って上下にしごくと、すぐに硬くなる。
「敏感ですね」
「だから、セックス中は、あんま触るなよ……っあ、イくっ」
手を動かしながら、眉を寄せて快感に耐える霊幻さんの顔をマジマジと眺める。
頬が赤く染まって。前髪が汗で張り付いて。……扇情的だ。
「……イき顔がそんなにイイかよ、変態」
「いや、良いですよ。エロいです」
「……っ」
顔を赤くした霊幻さんが唇を噛んで目を伏せる。
うーん。いまのもヤバい。そろそろやめないとこのままズルズル本番しちゃいそうだな……。
「霊幻さん、そろそろゲームに戻りませんか」
「お、そうだな。……トイレ行ってくるわ」
俺もぬるくなったコーラを飲みながらマンガの続きを読む。
『心臓を捧げよ！』か。かっこいいなあ。俺ももしかしたら捧げてたのかな、心臓。霊幻さんに。

※

座ってマンガを読む俺の足の間に収まって、霊幻さんは黙々とゲームをやっている。何故ならＩＣＯは名作なので。たまに俺にコントローラーを渡して難所をクリアさせるので、こんな姿勢になった。
恋人っぽくて、非常によろしいと思う。
「このゲームさぁ」
「はい」
「ずーっと続けばいいのに、って思っちゃうな」
「……はい」
美しい景色に、美しい音楽。
守るべき人と手を繋いで、どこまでも。
「クリアしたくないなぁ」
「……そうですね」
霊幻さんと２人、ネカフェの個室でこうやって過ごして。
……終わりたくない。
いけない、無意識に超能力を使って何かしちゃいそうだ。
俺はそれ以上、考えるのを止めた。

※※※※※

サイゼリヤに行きたいと言うのには勇気がいった。
単純に。
一度行ってみたかったのだ。
舌の肥えているであろう霊幻さんには申し訳ないが、他に付き合ってもらうあても無かったので思い切ってお願いしたら、軽くＯＫして貰えたのでホッとした。
「エスカルゴ食おうぜ、エスカルゴ」
「なんですそれ」
「カタツムリ」
「えええっ！？」
……何でも食べようとするのには困ったけれど。

「芹沢まだ食べられるよな？俺コレ味見したいから頼んでいい？」
「〰〰〰っ、それで最後ですよ！？デザートも頼むんでしょう！？」
無邪気に霊幻さんが笑うとネックレスが波打って、人目をひく。
正直、食事の途中からセックスのことしか考えられなくて。
あのネックレスつけたまま、バックから突きたいな、とか。
……。
さっさと食べてしまおう。
運ばれてきた皿を手に取ってがばがばと口に流し込む。
「大きな口だなあ」
す、と霊幻さんが足を組み替えて。
「ほれがなんですか」
「いや？それだけ大きな口だと、食べられがいもあるだろうなぁ、と思っただけだ」
ごくん、と。
もつ煮込みを飲み込む。
「……はやく、デザート頼んでくださいよ」
「はいはい。ホテル、ラブホでいいか？」
「……霊幻さんにお任せします」
デザートはティラミスだった。この人意味分かってるんだろうか。多分わかってるんだろうな。『私をハイにして！』か。できるだろうか。……やるしかないか。

※※※※※

「ちょっと待った」
いちゃいちゃしながらラブホのシャワーを浴びようとしたら、霊幻さんが俺のを見て固まる。
「きいてない」
「何がですか」
「ちょっと待て、ゴムのサイズあるかコレ」
霊幻さんがトートバッグを漁る。
「コレでイケるといいけど……」

ＸＸＬサイズのゴムの封を切って嵌めようとする霊幻さん。嵌まらないことはないけど、ちょっとキツいな……
「３Xか……ちょっとマサくんに買ってきてもらうから、待っててて」
霊幻さんが腰にバスタオルを巻いてマサさんに電話する。
「部屋に届けて貰えるって。……芹沢お前って童貞だよな？」
「あ、はい」
「やっぱり……お前、コレ下手すると巨根出禁だぞ」
「巨根出禁？」
「モノがデカすぎて、商品を傷付けるから店や組織から出禁くらうやつだ。冗談みたいだが本当にある処置だ。巨根のブラックリストなんてのも存在したりする」
「俺の、そんなに大きいですか？」
「……ちょっとしごいていいか？」
「あ、はい」
霊幻さんが真面目な顔して手コキしてくる。
くるくると先端を手のひらで刺激しながらこすられて、すぐに元気になった。
「……しかも硬い。最悪だ」
「最悪って……」
「外人みたいに柔らかけりゃ結構平気なんだが……あの、巨根ＯＫな男娼にチェンジとか……」
「は？」
めちゃくちゃ低い声が出てしまった。
「だよなー！？クソっ、今からほぐすから、先に風呂入っててくれ」
トートバッグから霊幻さんが子供の腕ぐらいの大きさのバイブを取り出してギョッとする。
「ちょっと大袈裟じゃないですか！？」
「芹沢くん、俺、ちょっと本気で集中したいから。風呂。入ってこい」
霊幻さんの目が据わっていたので大人しく風呂に入った。
風呂から上がっても、霊幻さんはローションをベタベタ足しながら

後ろをほぐしていた。
「こんだけ、やりゃあ、大丈夫……だろ。待たせたな。風呂入ってすぐ出てくるわ」
ぼんやりＡＶを見ていたら、宣言通り霊幻さんはすぐ風呂から上がってきた。
「──お待たせ」
スキニーとＶネックのセーターを着て。
ぞわ、と。
狩猟本能が刺激される。
そのまま壁に縫い付けた。
「あっ」
シャラ、と細いネックレスが音を立てる。
「ぁっ、んんっ、んぅっ…」
ベロリとネックレスごと喉元を舐め上げる。
「……よく似合ってる、はは」
自分の声が驚くほど発情していて、笑ってしまった。
冷えた霊幻さんの胸元の中で、暖かい頸動脈を舌でなぞって、前歯で引っ掻く。
「あと、つけちゃ、だめだからな、ぁっ、」
「らいじょーぶれす」
はむ、と頸動脈に、唇で噛み付く。
ひくん、と霊幻さんの喉仏が、本能的に震えた。
気持ちいいところって、急所が多いらしいけど、本当かな。……霊幻さんの反応を見ていると、本当かも知れない。
セーターを捲り上げて、霊幻さんの胸をマジマジと見る。
「……可愛い」
「……っ！」
「ずり落ちてこないように、咥えてて下さい」
「！」
たくし上げたセーターの端を、霊幻さんに口で咥えててもらう。
……意識してなかったけど、霊幻さんが自分で『見て』ってやってるみたいで、めちゃくちゃエロいな、コレ。
「……触りますね」

小さな乳首を片方は口でいじって、もう片方は指で適当にいじる。
「ん！んんっ、んぅっ、んんんっ、ん！ん！」
霊幻さんは俺の拙い愛撫でもピクピクと感じてくれて可愛い。
性器もじわじわと大きくなってくれるから、やりがいがある。
「……っ、へりらわ、いふっ……」
くしゃ、と霊幻さんが俺の髪を強くかき混ぜる。
じわ、とスキニーの股間が濃く染まって。
「うっそでしょ、エロ……」
思わずそう言うと、霊幻さんに軽く頬をつねられた。
「ちょっと、脱がしてもいいですか」
「……いいけど」
スキニーを太ももの中までずらすと、白濁でグチャグチャの下着と股間が出てくる。
「すっげ、中出しされまくった人みたい……いふぁい」
また頬をつねられた。
「霊幻さん、このままスマタしたいです」
「……もうする気マンマンじゃん」
霊幻さんの下着も太ももの途中まで下ろして、脚の肉がムッチリと尻側に盛り上がるようにする。
そのまま後ろを向いて貰って、ラブホのテーブルに上半身を預けて貰った。
「あ……」
ムチっとした脚の間に、生殖器を差し込んでいく。
「はぁっ……」
自分の声が野獣じみてて嫌になる。霊幻さんを襲ってるみたいだ。
「んぁっ……」
腰を進めると、霊幻さんの性器と俺の性器が擦れあってじわじわと性感が高まってくる。
「霊幻さん、れーげんさんっ」
ぱんぱんと犯すように腰を振ってしまう。引き締まった太ももの柔らかい肉と、ぐにぐにと絡む霊幻さんの性器が気持ちいい。
「あ、あっ、あっ、あ、あ、」
ネックレスをチャリチャリ言わせながら、霊幻さんも悩ましげに眉

をひそめている。もう俺も限界だ。
「うっ……」
太ももの間に擦り付けるように射精すると、遅れて霊幻さんもトロトロと精液をこぼす。
「どろどろで、エロいなあ」
ジロジロと白濁で汚された太ももを眺める。俺の量が多かったせいもあってか、本当にマワされた人みたいで、退廃的で興奮する。
「へんっ……たい！」
鑑賞された霊幻さんが真っ赤になってプルプル震えながら涙目でののしってくる。
「エロいっす……」
「〜〜〜っ！」
ぷんすこ怒る霊幻さんも可愛いが、そろそろ次に進みたい。
セーターを脱がせて、スキニーと下着を脱がせる。
「あ……」
少し霊幻さんが青い顔になる。
「……挿れんの？」
「はい、そろそろ」
「待って。……もっかいだけほぐさせて」
ベッドに上がった霊幻さんがローションを手に取る。
小さなアナルが何本も指を飲み込むのが不思議で、マジマジとその様子を観察してしまった。
「ん……いいよ。キて、芹沢」
届けられたコンドームを着けて。
俺はひたりと霊幻さんの後口に狙いをつけた。
「……いきますね」
ぐ、と押し込む。強い抵抗感。
「は、ぁっ」
霊幻さんが大きく息を吐いて、それでやっと先端が入った。
「あ〜〜〜〜〜〜〜、」
つうっと霊幻さんが生理的な涙を流して。だらりと性器が勃起しないまま精液を垂らす。
「ゆ、っくり、挿れて、」

「は、はい」
一気に穿ちたいのをぐっと我慢して、少しずつ中に埋めていく。
「んう〰〰〰〰〰〰〰、」
眉を思いっきり寄せた霊幻さんが噛んだ唇を噛み切ってギョッとする。
「霊幻さん、血が」
「は、へ？……ごめん、ハンカチ噛ませて」
霊幻さんが荷物から紺のハンカチを取り出してきてさるぐつわのように噛む。
「しょ、じょ、ん時以来だわ、この侵入されてる、感じ」
額に脂汗を浮かべながら、無理に霊幻さんがハンカチを手に話しかけてくる。
ぐっ、と腰を進めると、慌ててハンカチを噛んで衝撃に耐えていた。
「霊幻さん、処女だったことあったんですね」
「んぎ……あったに、決まってるだろ」
「どんな初体験だったんですか」
す、と霊幻さんの目が遠くなる。
「銃で脅されて……相手は上手かったから、出血とかはしなかったけど。相手は同意だと思ってたみたいだけど、まあ、ただレイプされただけだよ」
ガツンと頭を叩かれたようなショックを受けてしまう。どうしてだろう。この人は、愛されて生きてきたのだと、初体験も素敵な恋人と甘やかに遂げたのだと、何故かそう思い込んでいた。
「……すみません」
「いやいーよ。昔の話だし、っぐ、」
ゆさ、と霊幻さんが自分から腰を押し付けてくる。少し慣れてきたのだろうか。
「……半分、入りました」
「圧迫感すげーわ……」
「すみません……」
「あ♡」
思わず入ってる辺りを撫でたら、甲高い声が上がってびっくりして

しまった。
「……っ馬鹿、俺が感じたら締まって挿れづらくなるから、避けてたのにっ」
「……気持ちいいんですか、霊幻さん」
「……っ、あたりまえだろ……」
ぶわ、と血が上がってくる。ただ無理させてるだけかと思っていたから、俺ので霊幻さんが感じてくれてるのが、すごく嬉しい。
「ちょっと……待って……」
霊幻さんは何度も息を吐いて、ローションを足しながら少しずつ腰を進めていく。
……あの。
「霊幻さん、その、おれ、気持ちよくて……イキそうなんですけど」
「……も、ちょっと、我慢できない……？一度慣らさないと、ズコバコできないから……」
「……っ！なら、バリア張ります」
性器に薄くバリアを張って快感から逃げる。
「ん……挿れてくな……」
ず、ずる、ずぶ、と霊幻さんが俺を飲み込んでいく。
「も、少し……」
ひた、と。
俺の下生えと、霊幻さんの陰嚢がひっついた。
「入った……」
「やりゃあ、できるもんだな……はは、見てみろよ、腹ボコしてらぁ」
霊幻さんの薄い下腹が、俺の性器の形に膨らんでいる。
「このまま、ちょっと待ってくれ。……俺ん中が、芹沢の形に変わるまで」
なんでいちいち、この人は。
「それまで、ちゅーしようぜ芹沢。ほら」
チャリ、とゴールドのネックレスが鳴る。
誘われるように口付けて、脳が爆発したかと思った。快楽のヘビに後頭部まで貫かれた気分だ。肉と肉を絡め合うのがこんなに気持ち

いいなんて。霊幻さんをかきいだいて思わず腰が動いてしまう。
「あ゛っ」
霊幻さんが悲鳴をあげて少し逃げる。
「もうちょっとだから、ほら、変わってきただろ」
……ただ張り詰めていた霊幻さんの内部が、柔らかくなって、ひたひたと俺を包むように変わってくる。
「もうちょっと……」
ただ広がっていただけの入り口が、きゅ、と俺のの根元を締め付けた。
「……いいよ、芹沢。動いて」
「霊幻さん……っ」
バリアを解除して腰を振る。
「あっ♡あああっ、だめぇ……っ」
悩ましく目を伏せた霊幻さんが身もだえる。
「霊幻さん、可愛いです。俺の、そんなにいいですか？」
「おっきいからぁっ♡イイとこ、全部当たってぇっ♡やだぁ……っ♡♡」
ピピっ、と霊幻さんの性器から精液が飛んで、感動する。
「霊幻さん、可愛い。好きです。大好きだ」
「俺もぉ♡芹沢のこと、愛してるよ」
つうっと。
涙が自然に出てきた。
これは、あったかもしれない未来。
不埒で狡い大人に掻っ攫われる前に、どんな手を使ってでも、手に入れておかなくてはいけなかった人。
「……霊幻さん、愛してます……」
「俺もぉっ♡んぁっ、イく……！」
シーツに皺が刻まれる。
チャリチャリ鳴るネックレスに口付けながらバリアを解除して、腰をぐっと押し付けて解放感を味わう。
「……次はバックからお願いします」
「も、おれ、ガバガバになっちゃう……」
「俺以外のちんこだと満足できない身体になってみます？」

俺がそう言うと、霊幻さんは引き攣った笑いを上げた。

※

「あっ、あ、あ……♡」
もう何戦目だろう。霊幻さんは茹でたこみたいになっちゃった。全身ピンク色で、どこ触っても甘イキして、くにゃくにゃしてて身体に力が入らない。
「このっ……絶倫が……っ」
「体力には自信がありますね」
それでも、流石に疲れてきた。そろそろ終わりにしようかな。
終わり。最後のセックス。
……そう思うと、ずるずると何度もしてしまった。
「最後、ナマで出してもいいですか」
「……いいよ」
ゴムを外して、逃げる霊幻さんの腰を捕まえてバックからごちゅんと挿れる。
「ああああああ」
悲鳴を上げて性器から泡をふく霊幻さんの締め付けに逆らわず、
びゅーびゅーと最奥に精液を叩きつける。
「霊幻さん……愛しています」
ふにゃふにゃの霊幻さんを抱きしめて寝る体勢に入る。
「俺も芹沢のこと、大好きだよ。……愛してる」
ああ。
このまま2人で、何処かへ行けたのなら。

※

ふ、と夜中にいつもはない人の気配に目が覚める。
ああそうか、霊幻さんと寝てるんだっけ、と愛しい人を抱き直して眠ろうとした時。
「ん〜？くすぐったいって、えくぼ……」
その瞬間に霊幻さんを食い殺さなかったのは、やっぱり俺の愛情だ

と思う。
こんな。
こんな形で、夢をぶち壊しにするんですね、霊幻さん。
「霊幻さん、俺はエクボじゃないです」
「え……？せりざわ……？」
「はい」
ミチ。
まだ寝ぼける霊幻さんの後ろに無理矢理性器をねじ込む。
「え……っ！ダメだ芹沢、慣らしからしないと、」
「うるさい」
一気に貫く。霊幻さんが仰け反った。
「〰〰〰っかは、」
「最悪じゃないですか、名前を間違えるなんて」
ゆさぶる。案外動くものだ。
「やめ、やめろ……っ」
「おかげで、俺ってこんなに嫉妬深かったんだなあ、って知ることができました」
霊幻さんの頬を乱暴に掴んで口付ける。
「〰〰〰っ、やめろって、言ってんだろ！！」
かぁん、と。
顎に掌底をくらった。
脳が揺さぶられる。
その隙に霊幻さんは防犯ブザーを押した。
「霊幻さんっ！」
マサさんがラブホに乗り込んできて、電気を付けて息を呑む。
血だらけのベッド。
「やりやがったな、コイツ！」
拳を振り上げたマサさんを超能力で壁に縫い付ける。今、ちょっと、混乱してて、
「芹沢ぁ」
呆れた声と共に、霊幻さんに今度は右から掌底を食らった。
マサさんにかけていた超能力を解く。
「芹沢、正座」

「はい」
「マサくんは病院探して貰っていい？アナル見てくれるとこ。あ、保険証使えるところで」
マサさんがあちこちの病院に電話をかける。
「で、なんでこんなことしたのか言い訳をきこうか」
「あの……霊幻さんが寝言で、エクボくんを呼んでて……」
「チッ、ミスったな……で？」
「それで、カッとなっちゃって……」
「ほほう。寝言にキレて、慣らしもせずに突っ込んだ、と」
改めて言われて自分の理不尽さに小さくなる。
「すみませんでした……」
「分かればよろしい。でもお前を出禁にするかどうかは持ち帰って検討させてもらうからな？……あ、でもお前は今日でもう買わないんだっけ」
「あの！それなんですけど、やっぱり、俺、霊幻さんを諦めきれなくて……」
「はぁぁあ！？」
肩身が狭い。
なんでこんな、霊幻さんを抱きたいって言うだけで悪いことしてるみたいな気分にならなきゃいけないんだろう……。
「……とにかく俺は今から病院行くから、今日は解散！ご利用ありがとうございました！！」
ああ。
こんなことなら、霊幻さんを買わなきゃ良かった……。

３人の足並みが、いい感じに──バラついた。
霊幻と話し合って、引導そのものは霊幻から渡した方がいいだろうという結論になった。
俺様の仕事は霊幻を精神的に支えるだけだ。ま、それが１番難しいんだがな。とはいえ１０年も側に居れば慣れてきた。

昼の相談所。

準備中の札を下げて、あの３人と向き合う。
霊幻は所長の椅子に座って、俺様はその隣にふわふわと浮遊している。
シゲオ、律、芹沢は来客用のソファーに座っている。
「お前ら全員、出禁な」
青筋を額に浮かべながらニッコリと笑う霊幻が麗しい。
「そんな師匠、納得いきません！」
「モブ。お前、プレイが終わった後も指輪付けてるだけじゃなく、ＳＮＳに俺との匂わせ写真上げてるだろ？人妻のキャスト相手に何してくれてやがんだよお前。グレーのスーツを買ってきて部屋にかけるな。マスコミが俺の周り嗅ぎ始めてんだよ」
「僕は何もしてないと思うんですが愛しの人」
「律くん。言いたくないんだが、いつも時間超過しすぎ。後がつかえるんだよ。時間守れない客はクソ客なんだよなぁ悪いけど」
「……俺は……」
「芹沢は分かってるよな？何回俺を病院送りにしたか覚えてるか？」
「……３回」
「悪いけど巨根出禁だ」
さて、どう出る。
しかし３人は腕を組んで唸りながら、分かりました、と大人しく引き下がった。

「だって、そろそろ赤ちゃんに影響でちゃいますもんね、セックスしてると」

は……？

「モブ？どういう」
「楽しみだなぁ。男の子かな？女の子かなぁ」
立ち上がって霊幻の横まできたシゲオは霊幻の下腹を抱いて頬擦りする。
「師匠が赤ちゃん欲しいって言ったから、僕頑張ったんですよ？少し時間がかかっちゃいましたけど、ちゃんと子宮と卵巣作ってあげましたからね」
「僕と芹沢さんで調整もしてますから、完璧です。安心してください愛しい人」
「何を、言って」
……やられた……。
神の領域を鼻歌混じりに超えてくる。超能力者ってのはそういう連中だってことを、すっかり忘れていた。
「師匠のお腹の中にいるんですよ、僕との赤ちゃん！」
がく、と霊幻の身体から力が抜ける。
「危ない！……もう、しっかりしてくださいよ。ああ、でも正確にはわからないのか……多分２ヶ月前くらいに着床してると思うんですが」
霊幻が慌てて仕事用の携帯のスケジュールを開く。２ヶ月前。いっぱい予約が入ってるし、俺ともセックスしてる。
「……エクボ、赤ちゃんの父親、分かんない……」
変な泣き笑いみたいな顔のまま、霊幻がぼろぼろと涙をこぼす。
「産まれてみるまで特定のしようがありませんね。あーあ、霊幻さん、父親の分からない子供孕んじゃいましたね」
カタカタ震える霊幻の手を必死に小さな手で抑える。
「エクボ、俺、俺な、ここに子供がいるのなら」
「うん」
「小さな命が、いるのなら、……産みたい……っ」
お前なら、そう言うと思ってたよ。
「ごめんな、別れよう、エクボ。こんな迷惑かけられない」

３人がニヤリと悪魔のように笑ったのを俺様は見逃さない。
「大丈夫だ霊幻。一緒に育てよう。父親なんて、どの種かなんてどうでもいいじゃねぇか。俺は霊幻の子供なら愛せるぜ。３人で幸せに暮らそうや」
「……いいのか？」
「ああ。楽しみだな、男か、女か。部屋片付けて、グッズ揃えないとな」
「エクボ……っ」
「いや待て待て待て、何そこだけで完結しようとしてるんですか。許しませんよ。僕は認知を主張します。その子の父親は僕です。霊幻さんとその子は僕と暮らすべきだ」
「律、ずるいよ！それなら僕だって父親としての権利を主張する！師匠、新居はどんなのがいいですか？」
「待ってください。俺も父親の可能性があるんですよね？なら、黙ってはいられないです」

ぎゃあぎゃあ騒ぎ出した３人を見ながら、霊幻がくらりとめまいを起こす。

「！おい、しっかりしろ！！」

──俺たちの闘いはこれからだ。